

テサロニケ人への手紙 # 10

「神に喜ばれる生活」 | テサロニケ人への手紙 4 章 1 節～12 節

2020.10.25

はじめに

今日の箇所から、いよいよこの手紙の本論に入ります。先々週は長老の農園におじゃまして、収穫体験をさせていただきました。たくさんの秋の実りを収穫体験し、お裾分けに与ったわけですが、今年は特に栗が豊作で、わが家だけでなく、ご近所にもお配りできるほどいただきました。わが家では金木犀が例年より花をつけていまして、小さなオレンジの花をいっぱいつけて良い香りを楽しませてくれています。近所の人「今年は良く咲いていますね」と声をかけてくださるほどです。さて、今学びを続けていますテサロニケの教会は聖霊の実を結び、イエス・キリストの香りを放つ、模範的な教会に成長しつつありました。しかし、地上の教会である以上、完璧な教会はありません。成長著しい教会であると同時に、信仰の面で欠けているところがありました。金木犀が香りのよい花を咲かせるために、葉狩りや手入れが必要なように、パウロは手紙を通して、テサロニケの教会の霊的な手入れをしようとしているのです。

1. 聖い生活（道徳問題）

4:1 最後に兄弟たち。主イエスにあってお願いし、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを私たちから学び、現にそう歩んでいるのですから、ますますそうしてください。

パウロは手紙の中で核心部分に入るときには、読者の注意を惹くために「最後に勧めます」と記し、実践的な教えを記しました。ユダヤ人は生活することを**歩む**と表現しました。神に喜ばれる歩み、つまり神に喜ばれる生活は私たちクリスチャンの願いであり、ゴールであります。テサロニケの信者たちはパウロの生活態度から神に喜ばれる生活を学び、実行していたのですが、パウロはますますその生活を深めるようにと勧めます。これはクリスチャン生活の成長には限界がないということです。40歳であっても、還暦であっても、80歳であっても、この世に生かされている間、神に喜ばれる、喜ばず生活を送ることを神は求められるのです。これは私たちクリスチャンの究極的なゴールなのです。

これは極めて重要な事です。この点を外してしまうと、クリスチャンであっても全く違う生き方になってしまいます。クリスチャンはキリストの者として、御子イエス・キリストの尊い血が流されたことによって、買い取られた者たちなのです。イエスが私たちを罪から解放されたのは、私たちが自由にイエス様ようになるためです。私たちは自由に自分の優先順位を変えて、神を第一とする自由があります。罪赦されていない人にはその自由がないのです。自分より先に、他の人の必要に気を配る自由があ

ります。他の人のために自分を犠牲にする自由があります。このことが起れば起こるほど私たちはイエス様に似る者になります

主に喜ばれる生活、とは主イエスの再臨の希望と密接に結びついています。これから語られる実際的な勧めは、ただの道徳論ではなく終末の希望というものが前提にあります。

4:2 私たちが主イエスによって、どのような命令をあなたがたに与えたか、あなたがたは知っています。

4:3 a 神のみこころは、あなたがた聖なる者となることです。

パウロが神に喜ばれる生活としてあげたのは大きく分けて2つのことでした。それは「聖い生活と愛の生活」です。その一つ目が聖い生活です。この聖なる者の原語は3章13節に出てきた「聖さ」とは違います。あちらは完成された聖さを指しましたが、この**聖なる者**とは〈ハギアスモス〉聖くなっていく「聖化の過程」を意味しています。地上において完成された聖さが実現されていくのではなく、それを目指し歩むことが神のみこころなのです。

具体的にはどのような聖さでしょうか。これはテサロニケの文化背景に深く関係しています。テサロニケの町は、ギリシャ・ローマの異教的、文化にどっぷりと浸かった町でした。町には売春婦たちがたちもいました。そういう町に住んでいると、いつの間にか、罪を罪と思わなくなります。そこでは売春婦との交渉、婚前交渉、婚外交渉などが当たり前に行われていましたが、それに罪悪感を持つ人はまれでした。パウロはそのような環境の中から救われ、キリスト者として生活し始めたテサロニケの信者たちが、救われる以前からの考え方を改めないで、聖い生活について誤解を抱いたままで生活することがないように、神の国の聖さの基準について教えています。

①まず第一に

4:3b あなたがたが淫らな行いを避けることです。これはあらゆる不健全な男女の性関係を表わしています。このような性関係を罪とも感じない生活を送ってきた彼らに、そのような淫らな行いは神が喜ばれない、罪であると教えたのは、実はキリスト教でした。この罪は、個人の信仰生活を破壊するほど恐ろしいものです。パウロがコリントに書き送った手紙ではこう述べています。

I コリ 6:17 「淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。

「淫らな行い」は私たちの信仰生活を破壊するだけでなく、神の教会を混乱に陥れてしまいます。この性的な誘惑が、極めて強い力を持っていることをご存時な神は、このことを警告しておられるのです。またこれはこの時代に優って劣らない性的な乱れの中にある現代社会においても、必要な警告です。

今日「ポルノ」と呼ばれている言葉は、このギリシャ語に由来しています。この「淫らな行い」に対しては、ただ一言「避け」るように勧められています。性的誘惑に勝つ唯一の方法は、避けることなのです。誘惑に弱い私たちが、欲情を掻き立てられてしまう前に、その都度避けてしまうことです。それと真正面から取り組んで勝てる力など私たちには微塵もありません。自らが性的誘惑に弱い者であることをよく自覚していないと、簡単にころりと負けてしまいます。その時気づいても、もう遅いのです。

【例：ダビデとバテシェバ、ヨセフとポティファルの妻】

②第二には

4:4 一人ひとりがわきまえて、自分のからだを聖なる尊いものとして保つことです。この「からだ」と訳された言葉は、器という意味があります。これが自分の「体」のことなのか、それとも「妻」のことなのかは議論があるようです。しかしどちらに解しても意味は通じます。自分の体を聖く保つことによって聖い生活をしていくことができますし、また自分に与えられた配偶者である妻を大事にするによっても、聖い生活をしていくことができます。

③第三には

4:5 神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、4:6 また、そのようなことで、兄弟を踏みつけたり欺いたりしないことです。

ここでは異邦人とは違う聖い生活をするようにと薦められます。異邦人とはどのような生活をしていたのでしょうか。彼らは神を知らない人たちですから、神の御言葉という物差しがありません。自分で自分を制御できず、情欲に溺れてしまいます。ここには非常に積極的な欲望に対して、無抵抗に流されるという意味があります。つまり欲望の赴くままに、動物的生き方をしていたのです。

また神を知らない人は、「兄弟を踏みつけたり、欺いたり」してしまいます。これは他人の妻、夫と不倫の関係を結ぶということです。生けるまことの神を知らない人は、結婚の神聖を知りませんから、平気で他の人の結婚関係の中に踏み込んでいってしまいます。姦淫がなぜ罪であるか知りませんから、自分の欲望の赴くままに行動してしまいます。それをしないことが聖なる生活なのだと、パウロは教えているのです。

この三つは相互関係にあります。不品行を避ければ、自分の体を聖く保ち、しいては配偶者を大切にすることができます。また自分の体を聖く保ち、配偶者を大切にすれば、当然不倫などして兄弟を踏みつけたりしません。

パウロは次に、このような聖い生活をしなければならない理由を3つ挙げています。

第一の理由は、私たちが前もってあなたがたに話し、厳しく警告しておいたように、主はこれらすべてのことについて罰を与える方だからです。

性的罪を犯し続ける者に主はこれらすべてのことについて罰を与えるからです。罰を与えると言われた言葉の原語は、エクディコス「報復者」という意味です。これは私的な復讐を意味しているのではなく、神が正義の王であることを表わしています。神は御心になわない罪を、決して見過ごされないことが教えられているのです。神はすべてのものを見通しておられる義なる王であることを、この朝もう一度信仰によって互いに受け止めたいと思います。

第二の理由は、神の召しに関することで、次のように言われています。神が私たちに召されたのは、汚れたことを行わせるためではなく、聖さにあずからせるためです。

ここでの召しとは、キリストの体である教会への召し、つまり救いのことです。神の召しの目的がわかると、私たちは聖い生活をしないではいられないのです。私たちが救われたのは、私たちが聖化して、最後の時に、完全な聖さに至らせてくださるためです。イエスを救い主と信じたものは、みな「聖化の歩み」に召された者です。そして再臨の時に約束されている完全な聖さへの希望が、わたし達を聖さへと向かわさせるのです。

第三の理由は、4:8 ですから、この警告を拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたにご自分の聖霊を与えてくださる神を拒むのです。

神は、私たちがこの世から召し出してくださいました。そして私たちが聖くしてくださいました。そのために聖霊をお与えになったのです。聖霊は私たちに力を与えてくださるだけでなく、私たちが聖くしてくださいました。ですから、聖化させる聖霊に逆らうということは、神に逆らうことに他なりません。性的な罪は聖い神の憎まれるところです。それを犯すものは、人を拒むのではなく、神を拒むことになるわけです。そのような人には、聖化の可能性は残されていないのです。

私たちの住む日本は、道徳面に関しては、ソドムと、ゴモラ、ローマ時代の墜落した町のようなようです。こういった文化と価値観の中にあると、罪が罪と認識されなくなります。クリスチャンであっても気を付けていないと汚染されていきます。

この国にあって、神の恵みによって救っていただいた私たちは、神の忌み嫌われることを好んでするのはなく、神のご性格にふさわしく、聖い生活を聖霊なる神に助けられ喜んで歩ませていただきましょう。そこにこそ本当の自由があるからです。

2. 愛の生活（兄弟愛と労働）

さて、神に喜ばれる生活の第二の勧めは愛の生活です。その中でも2つのことが取り上げられます。

まずは兄弟愛です。

4:9 兄弟愛については、あなたがたに書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちで、

4:10 マケドニア全土のすべての兄弟たちに対して、それを実行しているからです。兄弟たち、あなたがたに勧めます。ますます豊かにそれを行いなさい。

あなた方こそ互いに愛し合うことを神から教えられた人たちであると。パウロはテサロニケの信者を兄弟愛について賞賛しています。パウロが彼らをほめる目的は、彼らを傲慢にするためではなく、ますます愛において成長させるためです。信徒たちは神に生まれ変われさせていただき、聖霊を心の中に受けたことによって神の愛を受け、イエスさまのように人を愛するようになっていました。そしてそれはその地域全体にいる主にある兄弟姉妹たちに及んでいました。しかしパウロはそれに満足することなく、ますます豊かに行うように勧めます。キリスト教信仰のゴール、神が喜ばれるのは愛の人になること、イエスの似姿になる事です。

テサロニケの信者たちの愛の成長はどこにあったのでしょうか？兄弟愛を実践するうえで必要になってくるのが、霊的自立と経済的自立です。霊的自立とは、幼い信仰から大人の信仰へと成長することです。信者ひとりひとりが聖書の御言葉のすばらしさに気づき、自発的に御言葉を読み、学ぶようになると、生活の中で神さまの言葉の力強さを体験することができます。それは牧師や教師に依存することではなく、神と自分の関係で生きていけることを意味しています。自分で霊のごはんを食べれることは、人生の全てが安定することを保証されるのです。このように自立したキリスト者は神の愛で兄弟姉妹を愛そうとします。事実テサロニケの信者たちはそのように地域の人々を愛しました。

もう一つの鍵が経済的自立です。すなわち労働です。

4:11 また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉としなさい。

4:12 外の人々に対して品位をもって歩み、だれの世話にもならず生活するためです。

何度か触れてきましたが、テサロニケの教会の問題は、聖書教理の理解不足からきていました。それは具体的には主の再臨についての誤解です。このことも現代の私たちが学ばなければいけない事柄です。

テサロニケの信者たちは、主の再臨が間もなくあると信じ、その期待が教会を間違った方向へ向けさせていました。ある人々はすぐに再臨があるのだからと仕事をしなくなり、ただ落ち着きなく、動き回っていました。このような状況の中で、パウロが兄弟愛を勧めていることに深い意味があります。

キリストの再臨が間もなくあるという期待と信仰が現実のものであり、それをまじめに受け止めていたのは正しかったのですが、そのような期待が間違った熱心に発展していく時、いつでも起こる危険性

というものがあります。それは何も手につかなくなり、興奮状態に陥るということです。毎日何もしないで、ただ熱狂的に祈り、歌い、集会ばかりをしていたのでしょう。そして自分たちの再臨信仰を、おせっかいに他の人たちに押し付けようとするのです。そういった人たちは、自分たちと同じようにしない人には、冷たい態度になり、信仰の落後者という烙印を押してしまいます。

ところが、このような人たちは、働かないわけですから、結果的に経済的負担を教会や家族にかけていました。信仰の落後者と烙印を押している人々の厄介になっているという、なんとも矛盾したことになっていたのでした。そのようなことが教会外の人たちへの良い証しにはなるはずもありません。霊的であることを誇ったとしても、社会生活をきちんと歩めていないなら、その人はキリストのよい弟子とはいえません。その人のキリスト者としての歩みは、教会生活だけで判断するのではなく、社会生活を含めて総合的に判断されるものです。

キリストの再臨は事実です。しかも、それがもうすぐであることも事実です。しかし、事実だと言って、何もせずにキリストの再臨を待望するというのが、クリスチャンの取る態度ではありません。むしろ私たちは心落ち着けて、自分の仕事に身を入れて、主の再臨がいつあっても、慌てずに迎えらるという生き方をしなければなりません。急に慌ててその準備をし始める生活ではなく、いつ主の再臨があっても大丈夫という姿勢こそが大切なのです。

「たとえ明日、世界が終わりになろうとも、私はリンゴの木を植える。」マルチン・ルター

クリスチャンは自分が置かれた場所で、与えられた仕事を忠実に行うことによって、自分の生活を得、同時に神の栄光を帰すのです。パウロは労働を、愛の生活の一つとして勧めました。本当に兄弟姉妹を愛するということは、霊的であることを誇るのではなく、自分の置かれた場で、「落ち着いた生活」と「自分の仕事に身を入れる」という外の人に証しとなるような社会生活をきちんと送ることによって自分の生活を得、同時に神に栄光を帰すことです。

おわりに

神に喜ばれる「聖い生活と愛の生活」を目指しましょう。私たちは、テサロニケの信者たちと同じように、乱れた性の価値観に囲まれて環境で暮らしています。神に召された者として、日々内在の聖霊に助けられ、不品行を避け、自分の体と結婚を聖く保ちましょう。

今以上に兄弟愛を深めましょう。お互いに自立したクリスチャンに成長し、弱さを覚えている方々に寄り添いましょう。社会の中に生きるクリスチャンとして良い証し人であるために、落ち着いた生活と与えられた仕事に身を入れて神に栄光を帰しましょう。